

パフォーマンスの現象学

オーガナイザ・提題者：河野哲也（会員、立教大学）、**提題者：**長滝祥司（会員、中京大学）・西川太智（非会員、中京大学）、田中彰吾（非会員、東海大学）、日向悠太（非会員、立教大学）

心の哲学や認知哲学における文脈では、知覚と概念をめぐるマクダウェル・ドレイファス論争以降、状況とイナクトする身体化された認知が中心的なテーマの一つとなってきた。上記のドレイファスの議論は現象学の立場に依拠しており、日本現象学会でも、2018年にS・ギアラガーやD・ハットを招いて、“Phenomenology of Skilled Performance”というタイトルの大会シンポジウムを行ったことはまだ記憶に新しい。身体性認知科学の分野では、格技も含んだスポーツ、また、とりわけ演劇やダンス、音楽、書道などのパフォーマティブなアートの分野に関心が集まりつつあり、日本認知科学会でも「間合い」をテーマにした分科会が盛んに活動している。これらのアートパフォーマンスは、現象学にとって、いまだに十分に研究されていない、大きな発展の可能性を持った分野である。

パフォーマンスに関する現象学は、以下のような特徴を持つ間身体的な相互作用を記述する分野である。①人間にとって現実的な身体と理想化された(あるいは、想像された)身体の間を行き来する身体的経験を対象とする。②パフォーマンスは、実技者同士(選手、演者、演奏者など)のみならず、実技者と観客(聴衆、評価者など)との間のインタラクションによって成立する創発的な作品である。③パフォーマンスは、技という反復的な運動に支えられながらも、一回的な現象＝作品である。パフォーマンスの経験は、技の身体知であるKnow-Howとも異なっている。これは、再現可能性を規範に置く従来のハードサイエンスの方法の不適合性を顕にすると共に、現象学にとっても、個別的で一回的な創発現象をどのように捉えるかという古典的な本質主義に根本的な疑問を投げかけるテーマにもなっている。

以上のようなパフォーマンスの特徴を考えたときに、「パフォーマンスの現象学的記述とは、そもそも何を指すものなのか」、「それを記述するというのはいかなる知識であるのか」、「パフォーマンスは“知りうる”のか」という否定神学にも似た根源的な問いへと繋がってくる。そこで、本ワークショップでは、スポーツ科学などで興隆している運動経験の質的記述を視野に入れながら、心理学・認知科学、スポーツ学、教育学の学際的立場に立って以下の提題を行い、最後にフロアと議論する予定である。

河野は、パフォーマンスの現象学的記述の意義について、デジタル人文学の観点と関連させながら論じる。長滝と西川は、パフォーマンスの理解やその身体的再現を、チームスポーツにおける共通体験と指導言語の観点から考察し、集団が〈共同暗黙知〉の次元へといたるプロセスを明らかにする。田中は、パフォーマンスの根底に間身体性に基づく相互編入的コミュニケーションを見出し、それが身体イメージを通じてどのように高度化するかを考察する。日向は、近年の教育哲学における発達論批判・エビデンスに基づく教育への批判を通じてスポーツ教育・体育の問題を指摘する。

【参考文献】 Biknell, K.& Sutton, J. (Eds.) *Collaborative Embodied Performance*, Muthuen Drama, 2022; Fridland, E. & Pavese, C. *The Routledge Handbook of Philosophy of Skill and Expertise*, Routledge, 2021; Grant, S. et al. *Performance Phenomenology*, Palgrave Macmillan, 2019; Maoilearca, L.C. & Lagaay, A. *The Routledge Companion to Performance Philosophy*, Routledge, 2020; Smith, B. and Sparkes, A. C. *The Routledge Handbook of Qualitative Research in Sport and Exercise*, Routledge, 2019; Welch, S. *The Phenomenology of a Performative Knowledge System*, Palgrave Macmillan, 2019.

知の構造における像（Bild）と通（Durch）をめぐって
フィヒテの『1804 年の知識学講義』とベームの『いかに像は意味を産出する
のか』を参考に

赤塚弘之

日本における現象学研究はその深化において哲学的な像理論を、とりわけフィヒテ後期の知識学における像理論を受容してきた。その代表として新田義弘等の研究が挙げられる。また、フィヒテ哲学から現象学へと、とりわけハイデガーの真理論へと接近する美濃部仁等の研究もある。

欧米においてはベーム等によって提唱された 1980 年代以降の「イコン的転回」の流れにおいて像理論が哲学の分野において次第に注目を浴びてきた。近年では理論知に対して感性的経験、ないしは感性的な知を強調する流れの中で、芸術経験を通じての像論がその一つの柱となってきた。そのような流れの中に新現象学派の像理論や、ロムバッハの像への考察は位置づけられる。

この二つの知の像性に関する動向を背景として本発表では、フィヒテの『1804 年の第 2 回知識学講義』（以下『1804 年知識学』略記）における知の像性とその「通 Durch」という構造を、ベームの主著『どのように像は意味を産出するのか』との比較において検討する。その際『1804 年知識学』に関してはフィヒテが「真理論ないしは理性論 Wahrheitslehre, Vernunftslehre」と呼ぶ前半部の知の像性とその根本的な構造である「通 Durch」、ないしは「交差 Durcheinander」についての考察に焦点をあてる。他方でベームの主著に関しては、彼の像理論の中核である「イコン的知 ikonisches Wissen」、「イコン的差異 ikonische Differenz」についての考察を中心に扱う。

フィヒテは『1804 年知識学』においてそれまでの彼の知識学講義の歩みを踏まえつつ、「哲学する」ということから知識学を改めて規定し、多様なものをその原理としての真理の統一性へと、すなわち絶対者へと引き戻すということをその課題として挙げる。だが同時にそのような統一は、多様なものの現出についての分離の原理としても示されなければならない。したがって知識学の課題とは、統一的な真理を同時に多様な分離への原理として発生的に「洞察すること Einsehen」になる。『1804 年知識学』の前半の真理論では、反省と抽象という方法論的な思考操作を用いて「事実的な factisch」「項 Glied」から統一的な真理である生き生きとした「光」、さらには自らのうちに閉じて自らで存立する統一的な「存在」へと発生論的に還元していく「上昇」の道を辿る。この思考の道行において知識学の洞察を含む知の在り方が、統一的で真的な光の像として洞察される。さらに像としての知と「像へと映し出される光 das Abgebildete」との相互関係は、通ないし「交差

Durcheinander」)として規定される。このような通の「通性 Durchheit」は、知識学的な洞察自らがそうである概念知の本質的な実在性として規定される。つまり、自らが概念知として出発する知識学的な洞察は、この通という光との根源的な連関を通して進められるのである。しかし、この通という構造連関を通して像と像へと映し出されるものという相互関係が成立している限り、徹底的に統一的である光へ、ないし内的に自らに閉じた存在へとは発生論的には到達することはできない。したがって、知識学的な思考の道程としての通はそれ自身のうちに否定性、すなわち存在へと到達するための自己否定を含む。このような自己否定を通して、知識学的思考は、その真理論の頂点において、自らを思考の道程を存在それ自身の活動的な自己生成として、すなわち「生きる我々」として提示する。

ベームは、自身の解釈学的な視点に基づき、多数の具体的な絵画やオブジェクトを考察することで、言語には回収されない像の固有な論理構造を示す。彼は像の本質を単になんらかのものの模写であるということにではなく、それが製作者、ないしは鑑賞者の視覚を通して生成し、自ら立ち現れるものであるということに置く。彼は像の根本的なあり方を「自ら示すこと」と「何かを示すこと」とであると述べる。この示すことの二重性を出発点に像の独特の「アイコン的なもの」、そしてその内的な本質が「アイコン的差異」ないしは「アイコン的否定」として言及される。ベームはこの「アイコン的差異」を主に「図」と「地」の関係において考察する。すなわち像はそれ自体がオブジェクトとして地でありながら、同時に図としてその像の主題を映し出す。しかし、その図において物体としての地それ自体は図を支えつつ背後に退く。逆に物体としての地へと焦点が絞られる限り、図は一旦宙づりにされる。このような図と地の相反する関係が絵画等の作品において否定性として経験される。この否定性の2項は、作品をみる人間の、すなわち製作者や鑑賞者の「視ること Sehen」の「構想力 Einbildungskraft」を通して作品の経験において「交差」され、像は像「として」生成する。こうして像は自らを像として示しつつ、自らを通して意味を、すなわち作品の世界を示すのである。

もちろん反省的洞察ということを通して知の体系における像性を問うフィヒテの洞察と、絵画をはじめとする具体的な図像を視るということに基づく経験を出発点としてその像性の固有な論理を探求しようとするベームの考察は異なるモチーフにおいてなされており、その差異とそれぞれの固有な点を見逃してはならない。しかし、どちらもが像を何かの模写、模倣ではなく知の根源的なあり方として捉え、固有な視と独特な否定性を通じて捉えているという点は、知の像性に関する共通する問題意識として検討すべきものであると思われる。本発表では、フィヒテの像性と通の問題をベームの議論と比較検討することで、理論知と感性知の「交差点 Kreuzung」としての知の像性を探求することを試みる。

ハイデガー哲学における人間と存在の相互前提の問題

加藤皓士

近年、思弁的实在論・新实在論なるものが話題になっている。そこではハイデガーが批判の対象となっていることが少なくない。ハイデガーは实在をめぐる問いに対して、どのように考えるのだろうか。

我々、認識するものに依存しない存在者を、仮に实在と呼ぼう。この呼称はあくまで便宜的なものであり、ハイデガー独自のものではない。認識する人間がいてもいなくとも何かが存在する。これは日常レベルでは自明なことであるように思える。しかし实在するものについて考えると、それを把握しようとする意識と言葉が介在してしまい、そこではその即自性は失われてしまう

大きく言うのであれば、ここには实在と認識の問題がある。いかにして我々は、实在をありのままに認識することができるのだろうか。もしくはそのような实在なるものは本当に存在するのだろうか。近年、实在を巡る議論の発端にはこのような問いがあるだろう。

我々が検討するのは、ハイデガーにおける人間と存在の問題である。重要なのは人間と存在の問題なのであって、人間と实在の関係ではないという点である。ハイデガーはそもそも認識論（我々は即時的なものを認識できるのか）もいわゆる实在論（何が真に存在するのか）も問題としない。このように考えるのであれば、ハイデガーにはいわゆる实在を問題とする必要がないように思われる。しかしハイデガーは、本当にこのような实在を巡る問題を避けることができているのだろうか。

注意すべきは、ハイデガーはあくまで存在は存在を理解する我々を前提とすると考えている点である（SuZ.S.240）。これは結局のところ、人間と独立に何ものも存在しないということではないだろうか。存在は存在者の根拠なのだから、存在が与えられなければ存在者も存在しないはずである。

しかしハイデガーは、自然と呼ばれる存在者は我々がそれを発見するかどうかとは関係なしにあると考えてもいる（GA24.S.240）。

存在はそれを理解する人間がいなければ与えられない。しかし存在者は、そのような現存在が存在しなくても存在する。これをどう理解すべきか。これは矛盾ではないのだろうか。

このような疑問を解消するためにも、私は存在と人間の関係性それ自体について考察するようにしたい。そのさい「として（als）」構造に注目したい。存在するとは、あくまで何か「として」存在するのであり、そこには「として」構造と呼ばれるものが働いているのである。

ハイデガーは、現存在が「存在させる」と考えている。この存在させるとは「として」構造に基づいて、存在者を何かとして全体から切り取りつつ、この全体へと結びつけることである。

しかしこのように考えるのであれば、そこでは以下のような疑問が生じる。「として」構造はあくまで我々の認識するものに属する次元であり、実在はこのような「として」構造を持っていないのではないか。2) もし存在することが、「として」構造を前提すると考えるのであれば、このような存在理解は一種の観念論ではないのか。

この問題を考える上で、私は「無 (Nichts)」に注目したい。ハイデガーは「として」構造がもはや働かなくなる事態を、不安という気分を分析する中で描き出している。そこでは「として」構造それ自体が、我々に対して無意義性を帯びたものとして押し迫る。これをハイデガーは無が押し迫ると呼ぶ。

そこでは存在者の全体が存在することが、無と「一つに (in eins mit)」なって露わとされると考えられている。不安において「として」を媒介することなく、直接に存在者の全体が存在することが開示されると、ハイデガーは考えている (GA9.S.113)。しかしあくまで無を媒介としているという意味では、存在者は端的に存在するとハイデガーは考えてもいない。この事態が理解できるのであれば、ハイデガーの考える謎めいた人間と存在の関係性について、ある程度の光をもたらしことができると考える。

発表では以下のように論を運びたい。1) 『存在と時間』における「として」構造について検討する。2) 『存在と時間』と『形而上学とはなにか』の無と不安の分析を検討する。人間なしには存在は与えられないのだが、人間なしにも存在者が存在するという、ハイデガーの謎めいたテーゼを理解する地平を開く。3) 近年話題となる実在の問題についてハイデガーの洞察がどのように関わるのかについて論じる。

・引用文献

SuZ: Martin Heidegger, Sein und Zeit, 19. Auflage. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2006.

GA: Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Vittorio. Klostermann

-Bd.9: Wegmarken, Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 2004.

-Bd.24: Die Grundprobleme der Phaenomenologie (Marburger Vorlesung Sommersemester 1927), Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 1975.

『有限性のあとで 一偶然性の必然性についての試論一』 カンタン・メイヤスー、千葉雅也・大橋完太郎・星野太、人文書院、2016年。

『なぜ世界は存在しないのか』 マルクス・ガブリエル 清水一浩、講談社、2018年。

サミュエル・トーデス『身体と世界』における「知覚カテゴリー」について

小松伸二

マクダウェルは『心と世界』において知覚経験に概念的な内容が伴うということを主張した。マクダウェルはカントの考えをもとに思考が空虚でないなら直観と概念との働きによって経験的知識が成立するとしている。マクダウェルの知覚経験の内容に概念的な内容が浸透しているという知覚の「概念説(conceptualism)」に対してドレイファスやテイラーたちはその考えを批判する。ドレイファスたちは現象学的分析を通じて知覚における身体の重要性を指摘する。彼らの分析によると身体技能を行使しているとき知覚経験の内容は非概念的なものである。ドレイファスらはマクダウェルの知覚の概念説に対する反論の根拠の一つとしてサミュエル・トーデスの『身体と世界』を挙げている。トーデスは『身体と世界』で身体が世界のなかで活動することが概念を構成する条件になるとしている。知覚経験に概念的な内容が含まれるようになるためには知覚や身体技能による対象との非概念的な関係が先行し、その後に概念という抽象的なものとの関係が可能になる。トーデスは身体経験によって構成される対象の分節化の働きを「知覚カテゴリー(Perceptual category)」と名付け、概念的カテゴリーとは異なるものと捉えた。そして知覚カテゴリーの働きは活動的身体によって成立していることを示した。

トーデスの考えを定式化すれば次のような段階を進みながら知覚経験は成立する。第一に私たちの統合された行為的身体は私たちが必要とするものに出会うために動き、その動きのなかで統一された時空間の領野を生成する。トーデスは身体運動によって時空間が垂直的領野と水平的領野によって構造化されていることを指摘している。例えばひとは世界のなかで適切な知覚経験をえるためには垂直的領野のなかで自らを定位付けることが必要となる。垂直的領野とは重力という上からの力によって規制された領野である。ひとは重力場に抗してある姿勢を保つ。第二に運動によって現れる時空間の領野のなかで我々は知覚的技能を行使して規定可能な知覚対象を構成する。第三に実践的に対象を知覚し、それらを規定することで対象について実践的な知覚的判断を下すことができるようになる。第四に私たちは知覚的な活動性を差し控えることによって実践的な知覚的判断を文脈に拘束されない離脱した性質をもつものとして知覚的認識を文脈から離れて捉えることができるようになる。このような知覚経験をもとに概念的経験の次元は成立する。すなわちトーデスによれば概念的カテゴリーよりも以前にわれわれは知覚カテゴリーを通じて対象を分節化し、その後に概念的な判断へと移行する。

本発表は、初めにトーデスのカント解釈について検討する。マクダウェルの知覚の概念説とは知覚経験の内容が徹底的に概念的なものであるという考えであるが、その思想的源泉のひとつはカントにある。トーデスはマクダウェルの知覚の概念説とは独立にカントの

なかに概念偏重主義を見いだし、それに異議を唱えていた。カントはたんなる知覚が客観性をもたないことを経験的判断と知覚判断の区別によって示した。カントによると知覚判断はたんに主観的に妥当する判断である。それに対し経験的判断はアприオリな純粹悟性概念にもとづくことでたんに主観的に妥当することを越えて客観的に妥当する判断となる。このようなカントの客観性の捉え方に対するトーデスの批判を検討する。トーデスは概念的カテゴリーの働きにのみ客観性を認めるカントに対して、身体技能においても客観性が成立することを認める。トーデスはカントの批判を通じてわたしたちの客観的经验の次元が二つの層から成立していることを示す。基礎的な経験の次元は身体技能を通じて構成される知覚的经验の次元である。その上層に概念的経験の次元が成立するとトーデスは分析する。トーデスの分析によればカントが客観性を概念的カテゴリーの働きにのみ限定したのに対し、身体技能に基づいた知覚カテゴリーがより基礎的な客観的经验を成立させている。

次にトーデスによる知覚カテゴリーの見解を検討する。トーデスによると知覚経験の内容は非概念的なものであり、活動的身体による知覚カテゴリーによって対象は構成される。

一般にアリストテレスにおいてカテゴリーとは類を表現する普遍概念であり、実体に対する述語としてカテゴリーは分析された。アリストテレスでは存在論的カテゴリーが分析の中心であった。だが近代哲学ではアリストテレスの分析は認識論的カテゴリーに置き換わった。そのさい最も影響力を持ったのがカントの概念的カテゴリーである。カントにおいてカテゴリーとは概念的なものとして捉え直された。認識論的転回以降カントによってカテゴリーとは概念の働きと見なされるようになった。

トーデスによれば身体と知覚カテゴリーとは密接な関係にあり、概念のカテゴリーよりも基礎的なものとして働いている。カントが感性に受容性しか認めなかったのに対し、トーデスは身体自体が自発性をもち知覚カテゴリーを通じて経験の対象が可能であるものとみなした。本論では、このようなトーデスの分析を検討することで知覚の概念説をめぐる論争に現象学的観点から考察を試みる。

参考文献

Hubert,Dreyfus & Charles,Taylor. 2015. Retrieving Realism .Harvard University Press,
(ヒューバート・ドレイファス、チャールズ・テイラー、『实在論を立て直す』、村田純一監訳、染谷昌義・植村玄輝・宮原克典訳、法政大学出版局、 2016 年)

Samuel,Todes. 2001. Body and World .MIT Press

音楽に媒介された政治的志向性の現象学のために
ネグリチード運動とハーレム・ルネッサンスについての哲学史的考察から

河野 哲也

現代のポピュラー音楽に政治的なメッセージが込められることは珍しくない。むしろ、現代の政治意識の醸成、特に若者のそれは音楽と切り離せないほどである。しかしながら、音楽と政治性、とりわけ解放と自由の希求を主調とする政治性との結合は、決して古い歴史を持つものではない。西洋の古典音楽の政治的保守性が指摘される一方で、大衆の音楽に解放の政治性を持ち込んだのは、ジャズ、ブルース、ゴスペル、レゲエ、ヒップホップの流れに見られるアフリカ人による創作と演奏であると言えるだろう。

本発表では、音楽と政治性がいかなる形で経験の中で結びつき合い、相互に意味づけあうかを解明する現象学を開始するために、まずは、19世紀後半以降のアフリカーナ哲学においてどのように植民地解放運動としての政治性が音楽と結びついてきたのかを、哲学史的な観点から解明することを目的とする。とりわけ、「黒人」であることの政治性を覚醒させたカリブ海諸島のネグリチード運動とそれに呼応したアフリカ大陸での政治思想の興隆、1920～1930年代初頭に米ニューヨーク市で生じた黒人による芸術活動であるハーレム・ルネッサンスとの内的関係を明らかにして、その後の世界的に拡大していく「音楽的政治性」への影響について追跡することにする。

ここで特に注目しなければならないのは、政治的言葉と音楽を結びつける詩が、歴史的に一定の集団的志向性を形成する役割である。本研究は、哲学史的な視点による「歴史発生的現象学」、すなわち、集団的で時代的な志向性の生成を明らかにしようとする試論であると同時に、音楽や詩といった芸術が志向性を形成・変容する可能性についての試論でもある。

人種差別と搾取の目印としての「黒い皮膚」を逆転的に評価し、南アフリカにおけるアパルトヘイト廃絶という記念碑的な出来事を準備したのは、スティーブン・ビコ（Bantu Stephen Biko）が唱導した「黒人意識運動」である。ビコの思想は、フランツ・ファノンの解放の思想から直接の影響を受けたと言われる。ファノンの「民族文化」の概念を受け継ぎ、ビコは、白人が搾取を正当化するために先住民のあらゆる文化を劣ったものと見なすように仕向けてきたことを指摘する。植民地的教化はアフリカ人に強力な劣等感を植えつけたが、アフリカ文化はそれにも耐えて力強く存続している。アフリカ文化の核心は、「人間を人間自身のために楽しむ」共同行動にあり、それは歌や踊りのコミュニケーションに表現されていると、ビコは主張する。ここには、解放の政治性を詩や音楽、ダンスと結びつける明確な宣言が打ち出されているが、この方向性は、実はファノンからではなく、黒人の政治意識を詩の形で表明したネグリチュード運動からの影響によると解釈できる。

ネグリチュード運動について、本論ではこれまでの評価を二つの点から補完する。一つは、ネグリチュード運動を、世界的な黒人意識の変革運動の中に位置づけること、特にアメリカ合衆国でのハーレム・ルネッサンスとの関連を明らかにすることである。ネグリチュード運動の主導者と見做されているのは、ファノンの師であるマルチニークのエメ・セゼールと、仏領西アフリカ生で、セネガルの初代大統領となったレオポール・セダール・サンゴールである。他方、ネグリチュード運動を創設し、『プレザンス・アフリケーヌ』誌の編集者であり、大学で教育し、ユネスコでも活躍したレオン＝ゴントラン・ダマス（Léon-Gontran Damas）の名前が哲学史から消えかけているのは遺憾である。アメリカの公民権運動の創始者であり、汎アフリカ主義を唱えた W・E・B・デュボイス（William Edward Burghardt Du Bois）の思想をセゼールやサンゴールに伝えてフランス語圏での運動を興し、「ネグリチュード運動のマニフェスト」とされる詩集『顔料（Pigments）』（1937）を書き、セゼールとサンゴールを米国のニュー・ニグロ・ムーブメントやハーレム・ルネッサンスの知識人、芸術家、活動家に紹介したのがダマスである。ダマスは、アフリカ・欧州・アメリカをつなぎ、黒人意識運動の世界化に尽くした。本発表では、デュボイスからのダマスへの影響と、ネグリチュード運動とハーレム・ルネッサンスの並行性について明らかにする。

第二に、両運動における芸術的表現、とりわけ、詩と音楽の果たした重要な役割を鑑みて、これらの黒人意識運動が、哲学の音楽的表現の可能性を開いたことを指摘する。デュボイスに始まる黒人意識の哲学は、一方で、北アフリカでのファノンの革命を準備し、他方で、米国で公民権運動はもちろん、ブルーノートやモータウンの芸術を経て、現代のアフリカ音楽へと開花していく双葉の運動として哲学史的に扱うべきである（ヒップホップにおける両者統合の可能性は別稿にて）。ハーレム・ルネッサンスの詩人であるラングストン・ヒューズ（Langston Hughes）は、黒人意識の表明としてのジャズとブルースを高く評価し、ダグ・パーカー・バンドのジャズ伴奏で詩“The Weary Blues（1925）”を朗読した。ヒューズの音楽は、米国で愛国主義とは異なる民主主義的な音楽教育を準備する。

こうして黒人性についての政治的意識は、詩と音楽を通じて興隆し、マスコミの発達と相まってより多くの人々に浸透していく。この浸透によって、従来の人種主義的な人々の行動と社会制度に対して批判的な意味を与える政治的志向性が生成された。こうした政治的な意味づけの力は、「間主観的」と呼びうるが、本論では、それが詩の朗読や音楽の合唱・合奏によって媒介されることを強調し、さらに A・シュッツの音楽経験の現象学が、集団的な政治的志向性の成立の分析に示唆を与える可能性を指摘する。

レヴィナス現象学のクィアな可能性を開くために
『全体性と無限』における繁殖性の問題と後期レヴィナスの展開

古怒田望人

E・レヴィナス現象学の着想の一つには性の観点がある。事実、彼の中心概念である「他者」概念が刊行著作で初めて主題化されるのは、『実存から実存者へ』(1947)の「愛撫」の記述においてである(cf. Levinas, 1947=1990 : 66)。また、捕囚手帳や小説『エロス』あるいは『悲しき豪奢』の草稿という最新の資料から、この性の観点がレヴィナス現象学の主題の一つであることが先行研究において明らかとなっており、近年積極的に論じられている(cf. ベンスーサン, 2014、渡名喜, 2021)。本論の目的は、この彼の性の記述の規範性を文献学的に引き受けつつ、その規範性にも拘わらず現れる可能性を提示することにある。そのために、レヴィナスの性の記述の規範性と可能性を、クィア(queer)という社会の規範的なジェンダー/セクシュアリティから逸脱するジェンダー/セクシュアリティを引き受ける仕方から浮き彫りにする。またこうした作業から、レヴィナス現象学をクィアな可能性に開かれたものとするを試みる。具体的には、1)『全体性と無限』(1961、以下 TI)がクィアの存在を抹消する点、2)この TI の規範性から後期レヴィナスのテキストが逸脱しクィアな可能性を示す点を論じる。尚、本論の読解方針はテキスト内在的である。レヴィナスがクィアに対して差別的であったかどうかではなく、彼のテキストが示す規範性を論じ、彼はクィアな可能性を考えていないとしても、彼のテキストが示すその可能性を指摘する。

主にフェミニストの立場の研究者から、特に 1961 年の TI 第四部で「女性的なもの」概念や繁殖性概念から大体的に展開されるレヴィナスの性の記述に対して、女性蔑視や家父長制が指摘されてきた(cf. Irigary, 1984、Sandford, 2000、Guenther, 2006)。しかしこれらの先行研究は、例えば TI 第四部がなぜ「顔の彼方へ」と題されるのかといった文献学的考察が十分になされていない点で不十分である。本論は先行研究に不足している文献学的考察を踏まえ、TI の性の記述の主題が時間論にあり、その時間論が孕む家父長制や異性愛中心主義という規範性を明らかにする点にまず特徴がある。他方でこれらの先行研究は、レヴィナスのテキストの中に家父長制や異性愛中心主義を逸脱する可能性が含意されることを見逃している。そこで本論は、後期レヴィナスの記述に着目し、そこにこの逸脱の可能性があることを示す。確かに、TI 以降の後期レヴィナスの記述には性の観点が欠けているとフェミニズムから批判が向けられている(cf. Ziarek, 2001)が、本論ではこの批判に対して、後期レヴィナスの記述は具体的な性(クィア)の観点から解釈可能であることを証明し応じる。

本論は次のように展開する。第一節では、TI の性の記述を時間論から批判的に検討する本論が、TI のテキスト解釈に則っていることを示す。そこで本論は、TI が全体性に抗し

て提示する倫理の主体では、その主体の死後の歴史の暴力に抵抗できないという問題に対して、TI が繁殖性概念——主体の死後に世代を介してその主体性を引き継ぐ時間構造を導入することを論じる。第二節では、この繁殖性の時間構造が生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点に収斂することを、TI 第四部の「女性的なもの」概念から繁殖性概念へ至る時間論の記述の筋書きから示す。第三節では、TI の繁殖性の時間論がテキスト上でクィアが存在を抹消する問題を、L・エーデルマンの『ノーフューチャー』(2004)を参照しつつ、明らかにする。彼は同著で、生殖と未来を結びつけ、その未来を特権化することでクィアが存在を抹消させる言説を「子どもなるもの」という象徴から浮き彫りにさせており、「息子」という象徴から生殖の未来を特権化する TI の繁殖性の記述の批判的分析に有効である。第四節では、後期レヴィナスの記述がこの TI の性の記述の規範性から逸脱しクィアな可能性を含むことを論証する。そのためにまず、主に『存在の彼方へ』(1974)の読解から、後期レヴィナスの老化の記述が初期からレヴィナスが構想していたプルースト的性愛に依拠することを示す。それにより、生殖や家父長制を軸としない性の観点を彼から引き出す。次に、レヴィナスのプルースト読解が表面上前提としている異性愛の観点到反して、異性愛者間の生殖のための性器に位置づけられないクィアな身体性を後期レヴィナスの記述が提示することを、『存在の彼方へ』の「愛撫」が「皮膚」や「内臓」という特性の身体器官に位置づけられない身体性から記述される点から示す。またこのようなクィアな身体性を「ままならなさ」から記述する後期レヴィナスが、L・ベルサーニのゲイの性の理論と交錯することを垣間見る。結語では、プルースト的性愛とクィアな身体性を背景とした後期レヴィナスの倫理が、クィアの社会、政治的な可能性と交錯するという今後の課題と展望を示す。

【参考文献】

ベンスーサン, ジェラルド, 2014, 「両義性と二元性: レヴィナスにおけるエロスのなものについて」(合田正人編『顔とその彼方』知泉書館, 213-232).

Guenther, Lisa. , 2006, *The Gift of the Other*. State University of New York Press.

Irigaray, Luce. , 1984, *Éthique De La Différence Sexuelle*. Les Éditions De Minuit.

Levinas, Emmanuel, 1947=1990, *De l'existence à l'existant*, Vrin.

Sandford, Stella. , 2000, *The Metaphysics of Love*. The Athlone Press.

渡名喜庸哲, 2021, 『レヴィナスの企て』勁草書房.

Ziarek, Plonowska Ewa., 2001, "The Ethical Passion of Emmanuel Levinas" in in Chanter, Tina. (ed.) *Feminist Interpretation of Emmanuel Levinas*. The Pennsylvania State University Press, 78-95.

遊び研究におけるガダマーの「遊び」概念の意義

宮崎勝正

本発表では、H.G.ガダマーが『真理と方法』において扱っている「遊び」の概念を取りあげ、現代の遊び研究における遊びの理解に対して、ガダマーの遊戯論が持ちうる意義を提示する。

子どものころ、公園で友だちと走り転げまわって笑ったり、警官や母親などの役になりきってふるまったりしたときの感覚を私たちは知っている。また、サッカーをして心地よい汗を流す、ジェットコースターに乗って緩急のついた浮遊感のスリルに心を躍らせるといった体験を持つ者も多くいるだろう。そういった経験は一般に、「遊び」といわれる。遊びでの活動は日々いたるところに見つけることができ、それだけにまた、遊びは私たちの生活を形作る重要な一要素であるように見える。とりわけ現代においては、遊びを子どもの発達や教育に役立てることが強く望まれており、多くの研究者によって、遊びのもたらす利益や価値の特定が目指されている。しかしながら、今日、遊びがとる具体的な形姿は多様性を増しており、いっそう曖昧で一挙に捉えることの難しいものとなっている。そこで、「遊びとは何か」という問いを哲学的な観点から慎重に取り扱うことが、遊びの理解にとって意義を持つと考えられる。

「遊び」を取り扱った哲学的議論のなかでも、とりわけ興味深い分析が行われているのが、ガダマーの『真理と方法』である。そこでガダマーが展開する遊戯論は、ただ、真理なるものが一般に生起し理解されるとき、基礎的なモデルを提示しているというだけではない。或いはまた、カントやシラーの美学以後に広まった芸術経験の主観主義的な特徴付けを退けるための道具的概念として「遊び」が利用されているというだけでは、必ずしもない。むしろ、ガダマーの遊戯論は、都度具体的な仕方で実現され自己を更新していく歴史的事象の一つの現われとしての、遊びという営為そのものの分析として価値を有していると考えられる。しかしながら、ガダマーによる遊びの説明は、今日の遊び研究においてそれほど十分に受容されているとはいえない。実際、遊び自体の特性を記述するという目的において、ガダマーによる遊びの説明は必ずしも明瞭なものであるわけではない。そこで、本発表では、ガダマーの遊戯論が遊びのより豊かな理解のために意義を持つと思われる二つの点について整理する。一つは遊びという現象を成り立たせているものを、遊びのなかに見出される一部の要素へと安易に還元してしまうのではないという点である。もう一つは、遊びを単にその内的な特徴から理解するだけでなく、現実世界との関連性というより広い文脈において捉えるという目標へと我々を誘うという点である。

第一の点について、遊びを定義付けようとする哲学的議論のなかでは、ときに遊び手の存在が特権的に扱われることがある。遊びを遊び手という観点から説明しようとした代表的な論者としては、アンリオ(1969)が挙げられる。アンリオによれば、ある活動が「遊び

である」ことはただ遊び手が与える意味にのみに由来するのであり、遊びの実在性の根拠は行為者の主体的な態度の外には決して存在し得ない。遊びとは人間に備わるア・プリオリな意味にほかならず、遊びを基礎づけるものは、遊び手の主体的な意識作用であると論じられる。そのように、遊び手の存在を重視することは、しばしば遊びの意味を主体的な態度に還元する見方へと帰結することがある。しかし、遊びを主観的な意味付けとして理解したとき、それは活動の構造や行為それ自体から分離され、意識内部へと秘匿されることになる。それとは対照的に、ガダマーは遊び手の存在に対する遊びそれ自体の優位性を強調している。遊びは遊び手の行為に対して一定の規範を与えるものである。とはいえ、遊び手の主体的な在り方がまったく否定されてしまうのではない。ガダマーが提示する遊びとは、遊び手の実践を通じて反復的に具体化されるなかで、同一性を保ちつつ自己を更新していく歴史的な事象であると考えられるが、そこで個々の遊びの実践は、事物の意味について遊び手が相互交流的な合意を結ぶような関係性として理解することが可能であると思われる。したがって、ガダマーの遊戯論は、遊びの実在性の源泉を何らかの部分的要素に還元するのではなく、遊びという営みをその全体性において理解することへと我々を導くものである。

この、遊びの全体性という観点はさらに、第二の点に関係している。ガダマーの言うように、遊びにおいて人は日常的な現実とは別の世界へ置き入れられる。とはいえ、そこで遊び手の従う規則や事物の意味がその遊びの内部だけで有効なものであるとしても、そのことは単純に遊びが日常的な世界と無関係であることを意味するのではないのである。ガダマーにおいて、遊びは遊び手を一定の行動規範に従わせるものであると同時に、遊び手の実践によってはじめて具体的に実現されるものである。この遊びの「自己表出」という性格は、遊び手の行為がまた、遊びという現象の自己更新の原理として機能しうることを示していると考えられる。そこで、遊びに参加する遊び手とは、逃れようもなく日常世界の歴史的・社会的構成に埋め込まれた存在である。そのため、ガダマーにおける遊びとは、少なくともその本質の一部が日常世界との関連性によって担われているようなものであると考えられる。その意味で、ガダマーの議論は、遊びと現実の関係性というより大きな全体性を、哲学的遊戯論の扱うべき課題として示唆するものである。

以上の二点に着目して、本発表ではガダマーの遊戯概念の持つ意義を、遊び研究という観点から検討し提示することを試みる。

文献

Gadamer, H.G, (1975). Wahrheit und Methode: Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik. Tübingen.

Henriot, J. (1969). Le Jeu. Presses Universitaires de France.

ハイデガーによる超越論的統覚の解釈について

森 正樹

本発表は、ハイデガーによる超越論的統覚を時間的に解釈する試みを再構成することで、「投企 (Entwerfen)」「予期 (Gewärtigen)」といった「将来」に関わる時間概念を再検討する。この作業によって、カント解釈のうちで投企・予期の働きに或る区別をみいだせること、またそれに応じて、それぞれの投企に関わる統一にも同様の区別がみいだせることを明らかにする。これによって、ハイデガーの『純粋理性批判』の解釈、とりわけ「図式論」や「三種の総合」といった箇所解釈に関して一つの読み筋を提供する。

前期ハイデガーは「存在理解を可能にするのは時間である」という自身のテーゼに最も迫った人物としてカントを挙げている。ハイデガーはカントを高く評価するが、そのカント解釈は周知のとおり独特である。ここでその概略を確認しておく。ハイデガーは感性和悟性の共通の根源には超越論的構想力があるというだけでなく、超越論的統覚をもその根源に超越論的構想力があると主張する。というのも、感性・悟性・超越論的統覚すべては超越論的構想力が有する根源的な時間的働きによって可能になるからである。本稿がみるところ、ハイデガーの解釈のこうした方向性は、解釈時期と解釈箇所によらず、大枠において変更はない。しかしながら、超越論的統覚を時間に関係させる解釈に関しては解釈時期と解釈箇所に応じて微妙な変化がみられる（もちろん、このように主張することは、他の論点でも解釈に微妙な変化があることを否定してはいない）。具体的には 1929 年の公刊著作である『カントと形而上学の問題』（全集 3 巻）において、超越論的統覚は、主に投企つまり「将来」に関わる働きとして解釈されている。しかしながら、そこに至るまでの一連のカントに関する講義においては、次のような解釈が提示される。すなわち、一方で主に「図式論」の解釈に注力を傾ける 1925/26 年冬学期講義『論理学——真理への問い——』（全集 21 巻）においては、超越論的統覚は「現在化 (Gegenwärtigen)」の働きとして「現在」に関わる働きから解釈を受けるが、他方で、主に「三種の総合」の解釈に注力を傾ける 1927/28 年冬学期講義『カントの純粋理性批判の現象学的解釈』（全集 25 巻）においては、超越論的統覚を予期の働きとして「将来」に関わる働きから解釈する方向性を提示している。まとめると、ハイデガーは、超越論的統覚の働きを「現在」に結びつけることを着手点としながらも、最終的には投企・予期という「将来」に関わる概念に結びつけていることとなる。

本稿が目指すのは次のような再構成である。すなわち、ハイデガーは超越論的統覚を投

企という働きから一貫して理解している、しかし「図式論」において、超越論的統覚はもっぱら現在化の内では出会われるものを可能にするという点から説明されるが、「三種の総合」において、超越論的統覚は、そもそもそうした統一を先行的に可能にする点から説明されている、というものである。換言するなら、「図式論」は超越論的統覚が既に働いている位相を問題としており、「三種の総合」は超越論的統覚が純粹に働き始める位相を問題としている、と再構成できる。こうして得られる投企の区別は、『存在と時間』における日常的・非本来的投企と先駆的決意性による本来的投企に関する区別についても示唆的な見方を提供するだろう。

参考文献

Heidegger, Martin.(1976), *Logik die Frage nach der Wahrheit*, Gesamtausgabe, Bd. 21., Vittorio Klostermann.

Heidegger, Martin.(1977), *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*, Gesamtausgabe, Bd. 25., Vittorio Klostermann.

Heidegger, Martin.(2006), *Sein und Zeit*, 19Aufl., Max Niemeyer.

Heidegger, Martin.(2010), *Kant und das Problem der Metaphysik*, Gesamtausgabe, Bd. 3., 2.Aufl., Vittorio Klostermann.

Kant, Immanuel (1976), *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner.

前期デリダ思想における「生き生きした現在」の位置付けの変遷

宗利風也

デリダは、修士論文として 1953-54 年に執筆された『フッサール哲学における発生の問題』(以下『発生の問題』) や 1962 年の『幾何学の起源』序説(以下「序説」)において、「生き生きした現在」をフッサール現象学のある種の限界を示すものとして論じている。しかし、生き生きした現在の位置付けに関して、『発生の問題』と「序説」とのあいだには隔たりのあるように思われる。本発表の目的は、『発生の問題』と「序説」を比較検討することで、前期デリダ思想における生き生きした現在の位置付けの変遷を解明し、その意義を明示することである。

周知の通り、これら二つのテキストのあいだには、多くの差異が存在する。その中でも最も大きな変化の内の一つを時間論に見ることができるだろう。例えば、『発生の問題』においてほとんど論じられていなかった歴史に関する問題が「序説」において主題的に分析されていたり、「序説」において「差延」の原型とも呼べる「遅延」というモチーフが登場したりしている。こうした変化は、「序説」以降のデリダの歩みを考慮するならば、デリダ思想にとって意義深いものだと言えるだろう。

こうした時間論における変化は、生き生きした現在の位置付けにも見ることができる。デリダは、『発生の問題』のころからすでに生き生きした現在を重要視しており、自身のフッサール解釈の要石としてきた。「生き生きした現在」について、『発生の問題』では、「フッサールは、「生き生きした現在」(lebendige Gegenwart)という主題についての省察の中で、自我の時間の受動的構成を分析しながら、乗り越えることのできない諸困難に直面することになる」(Derrida 1990, 238)と論じられている。また、「序説」では、生き生きした現在が「現象学的時間性の具体的な〈形式〉、すべての超越論的生の原初的〈絶対者〉」(Derrida 1962, 165)と定義されている。このように、デリダは、生き生きした現在という主題をフッサール現象学にとって重要なものだと捉えつつも、その解釈は変化している。

ところで、こうした変化は、デリダ思想の変遷にとって瑣末なものではないと考えられる。というのも、「序説」においてデリダは、「歴史」や「遅延」といったモチーフの根に生き生きした現在を据えているからである。このことから次のように問えるのではないだろうか。すなわち、デリダは、「序説」において生き生きした現在の位置付けを変更し、その根元的な性格を強調することで、自身の思想にとって重要なモチーフを導出したのではないだろうか、と。本発表では、『発生の問題』から「序説」に至るまでの変遷をたどること

で、この点を明らかにしよう。

具体的には以下のように議論を進める。

まず、生き生きした現在について簡単に確認した後、『発生の問題』におけるその位置付けを検討する。その際に注目するのは、デリダが、構成するものと構成されるものとの一致にジレンマを見出しており、このジレンマの時間的様態を「受動的綜合」から論じている点である (Derrida 1990, 215-241)。そして、デリダによれば、フッサールは、生き生きした現在について分析することで、このジレンマが逃れられないものだと自覚することになった。この点から、『発生の問題』における生き生きした現在の位置付けを明らかにしよう。

次に、「序説」における生き生きした現在の位置付けを検討する。デリダは、『発生の問題』と同様に「序説」においても、フッサールによる理念的対象の時間性の分析を検討することで、そこにジレンマを見出している。しかし、そこでは、理念的対象の時間性に関するジレンマの根が、それを直観する意識の時間性、すなわち生き生きした現在にあること、そしてその時間性もまたジレンマを抱えていることが論じられている。この点から、「序説」にける生き生きした現在の位置付けを明らかにしよう。

最後に、以上の変遷がデリダ思想にとってどれほど重要であったのかについてを検討する。この点については、「序説」末尾に登場する「遅延」というモチーフを分析することで解明しよう。デリダによれば、「遅延」とは、「方法的反省の始まりが、先行する可能的な他の絶対的起源一般の内包を意識することでしかありえないために、[...] 哲学的絶対者である」 (Derrida 1962, 170)。そして、この他の絶対的起源は、生き生きした現在において現出するものだと言われている。したがって、遅延とは生き生きした現在によって生み出されるものとも言える。遅延というモチーフが導入されたのは、生き生きした現在が理念に関するジレンマとはまた別のジレンマと捉えられると同時に、その根元性が強調されたためではないだろうか。この問いを解明することで、生き生きした現在の位置付けの変遷の意義を明示しよう。

主要参考文献

Derrida, Jacques (1962), « Introduction à *L'origine de la géométrie* » in *L'origine de la géométrie* d'Edmund Husserl, traduction et introduction par Jacques Derrida, PUF.

Derrida, Jacques (1990), *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, Paris, PUF.

自己触発と現象学的クロノロジー

中西淳貴

前期ハイデガーにおける伝統的形而上学批判は、その後のデリダによる「現前の形而上学」批判といった現代フランス哲学での展開はもちろん、ハイデガー研究においても広く注目を集めてきた主題である。しかし、その主題が、前期ハイデガーの思考の総決算とも言うべき『カントと形而上学の問題』(GA3) (以下、『カント書』) のうちに見いだされることは稀であった。あったとしても、それは構想力解釈にかかわるカントの「後退」という論点に終始することがほとんどである。その原因は、『カント書』があくまでカント解釈という体裁をとっていることのうちに見いだされるだろう。そして、たしかにハイデガー本人も『カント書』においては、『存在と時間』などに見られる伝統的形而上学批判を全面的に展開することを控えている。しかし、それに対して本発表は、まさに『カント書』の自己触発論のうちに伝統的形而上学批判の論点が含まれており、さらには、そうした批判の可能性の条件が論じられていることを主張する。

本発表が扱う『カント書』の自己触発に関する従来の研究の多くは、自己触発と理論理性の関係を取りあげてきた。よく知られているように、『カント書』における自己触発と実践理性の関係にかかわる記述が乏しいことがその理由のひとつである。しかし、近年の Dastur や森の研究など、自己触発と実践理性との関係を取りあげるものも見られるようになった。こうした先行研究は、『存在と時間』における良心論や、1927 年夏学期講義『現象学の根本諸問題』(GA24) (以下、「現象学講義」) におけるカント解釈を援用することでその内実を補足してきた。本発表は、こうした研究を批判的に継承する。さらにその際、先行研究が着目してきたのとは異なるテキストである、1925 年夏学期「論理学：真理への問い」(GA21) 講義 (以下、「論理学講義」) が提示した「現象学的クロノロジー」というプロジェクトに注目することで、先行研究の問題点を解消すると同時に、自己触発論がもつ伝統的形而上学批判の射程を明らかにする。

本発表は三節からなる。第一節では、後論に必要な限りで『カント書』の自己触発論に至る議論を要約して整理する。第二節では、「現象学講義」の尊敬論解釈と『カント書』の実践理性との関連での自己触発論を整理したのち、先行研究を検討して、それらが導入する「他なるもの」が不分明である問題点を提示する。第三節では、「論理学講義」における「現象学的クロノロジー」から自己触発論を解釈することで、先行研究の問題点を解消するとともに、自己触発論がいかなる意味で伝統的形而上学批判の可能性の条件であるかを

提示する。

参考文献

Heidegger, Martin, Gesamtausgabe, Bd. 3, Klostermann, 1991.

Heidegger, Martin, Gesamtausgabe, Bd. 21, Klostermann, 1976.

Heidegger, Martin, Gesamtausgabe, Bd. 24, Klostermann, 1975.

Dastur, Françoise[2004] : La phénoménologie en question: Langage, altérité, temporalité, Vrin.

森 一郎[2018] : 『ハイデガーと哲学の可能性 : 世界・時間・政治』、法政大学出版局。

1970年代のフェミニズム運動の展開においては、「女性の経験」という概念が大きな役割を果たしていた。「私たちは、自分の個人的経験と、経験をめぐる自分の感情を、私たちに共通する状況の分析の基礎とみなす」(Redstockings 1970: 112-113)というレッドストッキングスの宣言に見られるように、それまで権威を与えられてきた「客観的」な学問知・専門知に対して、そこから排除されてきた女性の経験を「見えるようにする」ことで、既存の男性中心主義的な社会構造を批判的に分析し、変革することが目指された。

しかし、1980年代以降、「女性の経験」に依拠するという戦略そのものに対する批判が登場し始める。ジョーン・スコットは「経験の明証」という論考で、ミシェル・フーコーの議論を踏まえながら、歴史学者たちが経験を「異論の余地のない証拠」や「説明の出発点」とみなしてきたことを批判し、経験、並びに経験の主体は言説的作用によって社会的・歴史的に構築されていると指摘した (Scott 1991)。スコットの議論は歴史学を主に念頭に置いたものであったが、その影響はフェミニズム理論全体へと広がり、「経験」という概念の価値は大きく損なわれることになった。

上記のような流れの中で、フェミニスト現象学のように現象学をフェミニズムに取り入れようとする試みもまた経験に依拠する素朴な言説であるとする見方が形成されることになる。しかし、そのような見方に対して、現象学を擁護し、現象学がフェミニズムに重要な貢献をなしうると主張する論者たちも存在する。そこで注目されているのが「還元」という方法論的手続きが有する実践的意義である。リンダ・マーティン・アルコフは、還元という手続きのうちにはスコットが要求するような経験の批判的相対化の契機が含まれていると主張している (Alcoff 2000: 48)。さらに、何人かの論者は、還元によって開示される超越論的主観性を社会的・歴史的規定を免れた純粹意識とみなす古典的なフッサール解釈を批判し、超越論的主観性を社会的・歴史的規定を容れうる人間的主観性として再解釈しようと試みている (e. g. Heinämaa & Rodemeyer 2010; Al-Saji 2017)。

本発表の目的は、フェミニズム理論の文脈において現象学とポスト構造主義を宥和させようとする上記の議論の展開を、とりわけ「還元」という概念の解釈の変遷に注目しながら辿り直すことで、フェミニスト現象学における「還元」という概念の位置づけを明確化するとともに、そこで提起されているさまざまな論点を踏まえて、現象学的記述という作業において還元という手続きが果たす役割を再考することである。

この作業を通して、まずは次のような歴史的経緯が明らかになるだろう。すなわち、還元という手続きが有する経験批判という役割は、たとえばフェミニスト現象学の古典とみ

なされているアイリス・マリオン・ヤングの初期の論考（Young 2005）などにおいてはまだ明確ではなく、ポスト構造主義的観点からの現象学批判に現象学が応答していく過程で徐々に明確化されていった——言い換えれば、現象学のうちに即自的に含まれていた契機が対自的に捉え直されるようになった——ということである。

そのうえで、還元という概念の役割をめぐるこうした議論の展開を踏まえて、フェミニスト現象学的「還元」の特徴を次のように規定したい。第一に、そこでは還元は、経験を相対化するために経験から一定の批判的な距離を取る手続きという「最小限の、しかし本質的な意味」（Oksala 2016: 7）で理解されること。第二に、還元を通して開示される経験の構築プロセスは、社会歴史的ないし言語的プロセスとして理解されること。第三に、経験はポスト構造主義が考えるように完全に構築されているわけではなく、構築を超えた側面を有しており、還元を通して開示される「生きられた経験」はまさしくそのような被構築的经验に対する剰余として理解されること。以上である。

参考文献

- Alcoff, L. M. (2000) “Phenomenology, Post-structuralism, and Feminist Theory on the Concept of Experience,” L. Fisher & L. Embree (eds.), *Feminist Phenomenology*, Kluwer, pp. 39-56.
- Al-Saji, A. (2017) “Feminist Phenomenology,” A. Garry, Serene J. Khader, & A. Stone (eds.), *The Routledge Companion to Feminist Philosophy*, Routledge, pp. 143-154.
- Heinämaa, S. & L. Rodemeyer (2010) “Introduction,” *Continental Philosophy Review*, 2010 (43), pp. 1-11.
- Oksala, J. (2016) *Feminist Experiences: Foucauldian and Phenomenological Investigations*, Northwestern University Press.
- Redstockings (1970) “The Manifesto of the Redstockings,” in Shulamith Firestone & Anne Koedt (eds.), *Notes from the Second Year, Radical Feminism*.
- Scott, J. W. (1991) “The Evidence of Experience,” *Critical Inquiry*, 17 (4), The University of Chicago Press, pp. 773-797.
- Young, I. M. (2005) *On Female Body Experience: “Throwing Like a Girl” and Other Essays*, Oxford University Press.

フッサール他者経験論の擁護

佐藤大介

生活の中で家族や友人といった他者と出会うことは、自明のことだと見做されている。しかし、自明であることは、理解されていることと同義ではない。ここでの他者とは、自分と同様な意識の働きを担いながらも、自分とは数的に別の者のことだと、ひとまず規定しておいて支障はないだろう。こうした他者についての経験では、他者の意識が直接的に捉えられているわけではない。もしこれが可能であれば、その経験の対象は、他者ではなく、私自身である。では、他者の意識が直接的に捉えられているわけではないにもかかわらず、他者が経験されているということは、どのように理解されるべきなのであろうか。このような問題関心のもとで、本論では、眼前の対象を他者として捉えるという意味での他者経験を取り上げ、この意味で「他者経験」という語を用いる。つまり、本論で扱う他者経験は、他者の具体的な意識内容や感情を見てとったり、他者とコミュニケーションをとったりするという意味での他者経験ではなく、こうした経験の前提となるものである。フッサールは、他者経験を改めて問い直し、多くの思索を重ねた哲学者である。彼は他者経験に関する議論を、『デカルト的省察』第五省察において展開している。これは、フッサールの公刊著作において呈示された他者論としては、最もまとまったものである。そこでは、ごく簡潔に言えば、次のように論じられている。私の身体物体と類似した物体が眼前に現れるならば、その物体も私と同様な身体物体と見做され、その眼前の物体は私と同じような意識をもっているものとして、すなわち他者として経験される、と。

フッサールのこうした他者論については、これまでに批判と擁護が展開されてきた。本論では、その中でも特に、ヘルトの批判とこれに対するアグィーレの反論を取り上げる。ヘルトは、フッサール他者論では他者が私とは別の現実的な者としてではなく、私を疑似的に二重化したものとしてしか説明されていないと、批判している (cf. Held [1972, 33-42])。すなわち、ヘルトの批判によれば、フッサール他者論では、私と類似した眼前の物体に私を単なる空想において移し入れることとして、他者経験が説明されており、他者の現実性および異他性が説明できていない。これに対してアグィーレは、ヘルトの批判では「動機づけ (Motivation)」に関するフッサールの議論が見落とされていると、反論している (cf. Aguirre [1982, 150-164])。アグィーレによれば、フッサール他者論では、他者経験に単なる空想が関与していると説明されてはおらず、私と類似した眼前の物体についての知覚に動機づけられていることに基づいて、他者は現実的なものとして経験されると、説明されている。このようにアグィーレは、他者の現実性については反論しているが、他者の異他

性については十分に論じてはいない。この不足を補わねば、ヘルトの批判からフッサール他者論を十分に擁護したことにはならない。

本論の目的は、他者経験がどのようなものをフッサールの議論に基づいて明らかにし、フッサール他者論を擁護することである。そのために本論では、他者経験における動機づけに着目し、これに踏み込んだ解釈を施す。具体的には次のように論じる。眼前の対象が私と類似したものとして知覚された際、その類似性についての知覚を理由として、その対象を現実の他者として認めることが帰結する。こうした理由 - 帰結の関係が、他者経験における動機づけの基本的な構造である。この動機づけを詳しく分析すれば、他者の異他性が動機づけられるうえで、知覚における感覚の受動性が重要な役割を担うことが明らかとなる。というのも、感覚は私によって生み出されたものではなく、否応なしに与えられたものであるという点で、その受動性は私ではないものを指し示しているからである。

上述のように論じるにあたっては、「第五省察」の他者論にフッサールの他の著作や草稿での議論を補う必要がある。というのも、「第五省察」での他者論は非常に圧縮されたかたちで論じられており、それだけでは議論の立ち入った部分が十分に明瞭ではないからである。したがって、本論では次の手順で考察を進める。まず、「第五省察」の他者論の概略を示す。次に、その他者論に対するヘルトの批判、および、この批判に対するアグィーレの反論について詳しく確認し、他者経験における動機づけがさらに議論を要する点として残されていることを、浮き彫りにする。そのうえで、他者経験における動機づけを手がかりとして、主に『イデーン』第一巻と第二巻を参照しつつ、感覚の受動性が他者の異他性を動機づけることを明らかにする。そして、同書を引き続き参照しつつ、感覚の受動性が反省において確かめられうることを示す。

主要参考文献

Held, Klaus [1972]: “Das Problem Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie,” in: Ulrich Claesges und Klaus Held (hrsg.), Perspektiven transzendental-phänomenologischer Forschung (Phaenomenologica 49), Martinus Nijhoff, 3–60.

Aguirre, Antonio [1982]: Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik, Darmstadt.

メルロ＝ポンティとコペルニクスの転回

柳瀬大輝

本研究の目的は、カントの超越論的哲学の立場を端的に示す術語である「コペルニクスの転回」にかかわる一連の言及を検討することを通して、メルロ＝ポンティの後期哲学における超越論的哲学への批判の内実とその哲学的意義を明らかにすることである。

近年、英語圏を中心におこなわれつつあるメルロ＝ポンティの「超越論的解釈」(Gardner 2015)においては、メルロ＝ポンティをカントに端を発する超越論的哲学の伝統においてどのように位置づけるかが問題となっている。けれども、そうした解釈は、ほとんどの場合、『知覚の現象学』を中心としたメルロ＝ポンティの前期哲学における超越論的哲学の批判的改鑄しか論じていない。けれども、最晩年の著書『見えるものと見えないもの』においても、メルロ＝ポンティが、対象としての世界とそれを表象する超越論的主観という発想を「上空飛翔的思考」(VI, 104)として批判し続け、それとの対決において自らの思索を語っているという事実を考慮するならば、以上のような超越論的解釈の問題関心は、後期哲学へと拡張されなければならないであろう。

こうした課題に取り組むためには、まず、後期哲学において、『純粹理性批判』における超越論的哲学の立場がどのように位置づけられているのかが明らかにされなければならない。この点に関して、メルロ＝ポンティは、1956/57年講義「自然の概念」において、カントの「コペルニクスの転回」の哲学的意義についての自らの理解を開陳している(N, 40-43)。よってまず、本研究は同箇所を検討し、メルロ＝ポンティが「コペルニクスの転回」の問題点を、人間的主体を世界を構成する「力」(N, 41)として理解する人間中心主義のうちに見ていることを示す。

では次に、こうした超越論的哲学の批判的乗り越えはどのようにして果たされることになるのであろうか。先行研究は、こうした点を、『判断力批判』(Carbone 1998)やシェリング(加國 2002)への言及を通して解明してきた。これに対して本研究は、上述の「コペルニクスの転回」に着目し、同概念を軸として、メルロ＝ポンティの超越論的哲学批判を辿っていく。その際、検討されなければならないのは、フッサールの晩年の草稿「コペルニクス説の転覆－原方舟としての大地は動かない」(Husserl 1940)(以下「大地は動かない」)について論じるテキストである。実際、メルロ＝ポンティは、「コペルニクスの転回」を検討したのと同じ講義において、カントの「超越論的観念論」を、再び提示したうえで(N, 102-103)、フッサールの「大地は動かない」を検討していく。同草稿の検討は、59/60年講義「現象学の限界に立つフッサール」においても再び取り上げ直されることになるが、以上の二つの講義における検討を通して、メルロ＝ポンティが試みるのは、「コペルニクス

の彼方に (par delà Copernic)」、主観と客観という二項対立の「地盤としての大地の意味を回復すること」(NCOG, 82)である。こうした「大地」の概念が、表象する主観と表象される客観という二項対立に先立つ「なまのあるいは野生の存在の秩序」(VI, 253)という晩年の「存在論」の特権的な主題と重なるものであることは言うまでもない。以上の検討を通して、メルロ＝ポンティの後期「存在論」は、相互に隔たった星と星(＝主観と客観)という「コペルニクスの転回」の枠組みを超えて、両者がそこから生じてくるような大地それ自体を掘り下げていくような「考古学」(NCOG, 81)へと超越論的哲学を批判的に乗り越える試みであることが明らかにされることになる。

文献表

・一次文献 (略号)

VI : Merleau-Ponty, Maurice. 1964. *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard.

N : – . 1995. *La nature*, notes cours du Collège de France, établit et annoté par Dominique Séglaard, Seuil.

NCOG : – . 1998. « Husserl aux limites de la phénoménologie », Notes de cours sur l'origine de la géométrie de Husserl. Suivi de recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty, sous la direction de Renaud Barbaras, PUF, 11–92.

・その他の文献

Carbone, Mauro. 1998. « Le sensible et l'excédent. Merleau-Ponty et Kant », Notes de cours sur l'origine de la géométrie de Husserl. Suivi de recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty, sous la direction de Renaud Barbaras, PUF, 163–191.

Gardner, Sebastian. 2015. “Merleau-Ponty's transcendental theory of perception,” *The transcendental turn*, Oxford University Press, 294–323.

Husserl, Edmund. 1940. „Grundlegende Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur“, *Philosophical essays in memory of Edmund Husserl*, ed. by Marvin Farber, Harvard University Press, 307–325.

加國尚志. 2001. 『自然の現象学』, 晃洋書房.